

発表者氏名： 白銀 有紀

所属学校： 小学校

派遣職種： 小学校教諭

派遣国： セネガル共和国

派遣先： ティエス州立教育委員会

タイトル：
セネガル ネハナ
(セネガルは、いいところだよ。)

キーワード： たたかい

発表要旨：

「マイマ (ちょうだい)。」「エ、チュバップ (おい、外国人)。」…私達が、道を歩いているとセネガル人にこのように声をかけられる。挨拶を何よりも大事にしているセネガル。挨拶の言葉、「アッサラーム マライクン (イスラム教の挨拶：こんにちは)。」と同時に、セネガルで一番初めて覚えた現地語がこれである。そして、直接の職場である小学校に行くと、歓迎の言葉の次には「(あなたが授業できるように) 時間をあげるよ。」と言われたり、先生が授業に平気で遅刻をしてきたりする状況であった。実は、私の要請書には、現地の教員は、情操教育 (音楽・図工・体育) を教えたくても、知識や技術不足のために、教えられなくて困っている。そのために現地の教職員に技術を伝授して欲しいと書いてあった。さらに、自分の住むことになっていた家には泥棒が入り、前任者が残してくれていた電化製品は盗まれ、玄関は破壊され、任地に赴き初めていったところは、警察署であった。

「セネガルによこそ。君が来るのをずっと待っていた。」「一緒にセネガルの教育をよくしていこう。」…配属される前、そんな風にセネガルに迎えられると幻想を抱いていた私は、愕然とした。

「何のために、私はここに来たのだろうか。」「なぜここに来たのだろうか。」そんな疑問を抱かざるを得なかった。

そんな私のセネガルでの生活を一言に例えるなら、『たたかい』という言葉に尽きよう。日本での私は、自分の言いたいことを言えないこともあったのだが、セネガルでは、歯に衣着せぬ言葉で言い合うことがたびたびあった。そんな意味でも‘たたかい’なのだが、今思うと、自分自身との‘たたかい’だったのだと思う。どのようにセネガルを受け入れ、どのように折り合いを自分の中でつけてきたのか…。仕事やセネガルの生活の中での‘たたかい’の様子、また、その‘たたかい’から得たことや学んだことを話したい。

ある小学校での図工の授業。一人ひとり発表する時間がとれないので、作品をグループごとに頭上に掲げさせます。「トレ ビアン (上手に描けたね)」のその一言が欲しくて、何度も作品を見せに来る子がいます。

